

日中医学交流史

56. 甘草と甘草屋敷

陶惠寧

イスクラ産業株式会社中医学講師
順天堂大学医学部非常勤講師

JR 中央線塩山駅北口を出ると、江戸時代の面影をそのまま残したような大きな木造民家が目に入る。それは中国漢方とつながりがある有名な「甘草屋敷」である(図1)。

甘草とは

甘草(カンゾウ・リコリス)は、中国北部、ヨーロッパ、地中海、ロシア南部、中央アジアなどを原産とする低木で、ユリ科のノカンゾウとは異なるマメ科の多年生植物で、ウラルカンゾウ(東北甘草)、スペインカンゾウ(西北甘草)などの品種がある。

ラテン学名 *Glycyrrhiza uralensis* Fischer 又は *G. glabra* L. はスイスの植物専門家によって1737年に正式命名された。*Glycyrrhiza*(グリキルリザ)はギリシャ語の *glycys*(甘い)と *rhiza*(根)の合成語で、薬用にする根が甘いことから生まれた。

英名「liquorice(リコリス)」はラテン語の *liquo*(液体にする)から *liquiritia* という形になったものが英語に借用されたという説がある。

ちなみに、「Licorice candy」リコリス菓子と



図1 甘草屋敷(旧高野家住宅)

は、甘草の根及びアニスオイルで味付けされた菓子である。オランダでは動物やコインなど様々な形状のリコリス菓子が作られるほど根強い人気があり、ドロップ(Drop)の名で親しまれている。これが日本語のドロップの語源になったといわれている。

和名「甘草(かんぞう)」、漢字の通り、甘味がある草から、中国でも、日本でも、「甘草」と命名されている。

甘草が利用されるのは根だけだが、根茎(水平方向に伸びた地下茎が肥大化したもの)も利

用される。これまで乾燥させた根から400種類もの多種多様な化合物が分離されている。そのなかでもっとも重要な有効成分はグリシルリチン(酸)である。グリシルリチンは、砂糖、きび糖のおよそ50倍の甘みを有する化学物質なので、甘味料としてしょうゆ、味噌、チョコレートなどの菓子類に、そのほか多くのハーブ系リキュール、タバコ、化粧品などの成分として広く利用されている。

日本で栽培されているのはわずかであるが、現在、年間数千トンが海外から輸入され、そのうち3分の2が食品の甘味料として使われ、残り3分の1が薬用にされている。

甘草の海外輸入の3分の2は中国に頼ってきたが、乱獲の影響で自生地が減少し、中国政府が甘草の採集と輸出を制限するに従って、甘草の価格が高騰している。

2011年11月、甘草(リコリス、*Glycyrrhiza glabra*)が世界的にみても人々の幸福と健康にとってもっとも重要な植物として、「WWF(世界自然保護基金)ドイツ」で、「2012年の薬用植物」に選ばれた。

甘草の歴史

甘草は紀元前より西洋医学・東洋医学の世界を問わず広まり、親しまれてきた。ヨーロッパと西アジアにおいては、甘草の歴史は紀元前の古代バビロニアまで遡る。

エジプトのツタンカーメン王の墓から宝物と一緒にたくさんの甘草が発見された。マイサスという飲料に甘草が使われていたことなどからみると、甘草が甘味料、強壯剤として飲用されていることがうかがえる。

紀元前5世紀ごろに編集されたと考えられる

『ヒポクラテス全集』にも、その名前が出てくる。

アリストテレス時代の医学書には「甘草は喘息や胸部疾患によく効き、蜂蜜と混ぜて外傷薬にも使用する。口中に含めば渴きを癒せるので、甘草と牝馬のチーズさえあれば12日間の旅に耐えられる」と記録されている。

アレキサンダー大王(紀元前356~前323年)は甘草を貴重不可欠な兵糧として各地の遠征の折に携行させた。この軍隊が炎熱の砂漠の戦いに強かったという古い記録が残っているが、その理由として甘草の効用が考えられる。

ギリシャでは、古代ローマの皇帝ネロの侍医だったディオスコリデイスが書いた『ギリシャ本草』(『マテリア・メディカ』ともいう)に *Glyks*(甘い) *rhiza*(根)として記載される。

世界最初の法典『ハンムラビ法典』に甘草が法定薬物として載せられている。

1820年、甘草がアメリカの薬典に収録された。その後、イギリス、フランス、ロシア、ドイツなどの国が次第に薬典に収録した。

ナポレオン(1769年~1821年)は家系的に胃が弱く、胃病になることを恐れ、予防手段として甘草根をかじっていたという逸話もある。

中国では、「甘草」の名前は紀元前200年頃の中国最古の辞書『爾雅』に初めて現れたが、薬用の記載は中国最古の薬物専門書『神農本草経』が最初である。

紀元前139年、『淮南子』に「甘草、主生肉之薬也(甘草が筋肉を作る生薬である)」と記している。

その後、歴代の漢方医書に甘草に関する記述が盛りだくさんあるが、ほとんどが一番重要な生薬としての位置付けで説明している。

延喜式(925年)に甘草の和名は阿末岐(あ

まき)とあり、現代式換算法によると、9.2kgが朝廷に献納されたという記述がある。

江戸時代の『本草綱目啓蒙』(1803年)に「延喜式 典薬寮 諸国貢薬目次ニ常陸陸奥出羽ヨリ甘草ヲ献スル事ヲ載ス、今ハ各国自生アルコトヲ聞カズ」という記載がある。もともと乾燥した地域に生育する甘草は、多湿な日本での栽培はとても困難なことで、その国産化がうまく進まなかった。

現在では、まだ甘草のほとんどが輸入されているが、国内栽培の試みも始まっている。

漢方の甘草

甘草(かんぞう)は、天草、蜜草、美草などとも呼ばれている。

甘草の効能は『神農本草経』で「堅筋骨、長筋肉、倍力(筋肉・骨格を丈夫し、力を増す)」と記されている。漢方の経典『傷寒論』では70処方、『金匱要略』では88処方に利用されている。晋の時代、薬物専門家陶弘景が『名医別録』で「安和草石而解諸毒(諸薬を調合し、諸毒を解す)」ができることで、甘草を「国老(帝王の師)」と称した。

中国においては、甘草の主な産地は内モンゴル自治区、甘肅省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区などがある。甘草は根(一部の種類は根茎を含む)を乾燥させたものを生薬として主に解毒、矯味、調和諸薬に用いられている。漢方処方に最も多く使用された基本的な生薬であるので、「十方九草(十個の漢方処方の中で九つの処方は甘草を使っている)」という話もある。

日本には630年以降の遣唐使の派遣により、奈良時代(8世紀)に中国文化とともに甘草が

伝えられた。渡来した当時の良質の甘草は医学的に貴重な植物として、現在も正倉院御物として保存されている。

甘草は漢方医学の発展とともに医療に多く用いられた。徳川時代の漢方大家吉益東洞の『薬徴』には「甘草は急迫(急激な痛み)を治す」鎮痛剤として活用したことも記されている。

現在では、薬用甘草は主に漢方薬の原料として、厚生労働省指定一般用漢方製剤210処方中の150処方(71%)に配合される主要生薬のひとつである。

甘草屋敷(旧高野家住宅)

山梨県甲州市塩山上於曾(かみおぞ)村で高野家は長百姓(おさびやくしょう)を務めた家柄で、代々伊兵衛を襲名し、幕末には名主として苗字帯刀が許されていた。高野家の祖先である伊兵衛が近くの村人から根を分けてもらい、甘草の栽培を始めた。

江戸時代、八代将軍徳川吉宗治世の享保5年(1720)に、徳川幕府の本草学者・採薬使であった丹羽正伯(にわしょうはく)が当家を訪れ、屋敷内にあった甘草を見分した結果、幕府御用として漢方薬の主要原料となる薬用植物の甘草の栽培と管理が高野家に申し渡されるとともに、一反十九歩(約1,055m²)の甘草園を創設し、年貢・諸役を免除された。以後ここで栽培される甘草は東京都文京区にある幕府官営小石川御草園(小石川植物園の前身)で栽培するための供給源となり、また薬種として幕府へ上納を行うこととなった。これらの経緯により高野家は古くから「甘草屋敷」と呼ばれてきた。

高野家はこの甘草栽培と管理により明治5年(1872)まで免税の特典を受けていた。このこ



図2 『甲州甘草文書』

とから、江戸時代でも甘草がとても大事にされていたことが伺えるだろう。

昭和3年(1928)文部省嘱託上田三平の調査により、高野家に所蔵されていた歴代当主と村役人の書状を主とした甘草関係文書59点が稀有の史料として保存されて、上・中・下の三巻の卷子本『甲州甘草文書(こうしゅうかんぞうもんじょ)』(図2)にまとめられ、翌年巻頭の題字に理学博士白井光太郎が本文書の価値を述べ、跋に上田三平が「甘草に関する我国の史料にして他に類例を見ざるもの」と記している。

『甲州甘草文書』は平成11年(1999)9月9日、山梨県指定文化財(書籍)に指定された。

甲州を代表する民家として、高野家住宅(主屋)は全国的な民家調査が始まる以前の昭和28年(1953)3月31日に重要文化財に指定されたが、所有者が実際に居住しており、長らく一般公開はされなかった。平成5年(1993)所有者より当時の塩山市に寄附されてから、同市により住宅が旧状に復元され、「薬草の花咲く歴史の公園」として整備され、一般公開された。

その後、平成8年(1996)7月9日、江戸時代後期の建築で、付属屋、附けたり及び井戸・

池・石橋・石垣を含む宅地が重要文化財の追加指定を受け、名称も「旧高野家住宅」に変更された。

甘草屋敷の主屋南側に甘草園があり、栽培されていた甘草はウラルカンゾウ(東北甘草)と呼ばれる。その他、クラブカンゾウ(西北甘草)などもある。『甲州甘草文書』によると、この甘草園の薬種甘草は中国から伝わったもので、自生していた甘草は日本最古の甘草という言葉い伝えがある。

3階建ての主屋の上層階は甘草の乾燥、養蚕飼育に用いられた。

現在の甘草屋敷には生活道具のほか、『甲州甘草文書』など薬草に関する様々な文書や甘草(新疆甘草、東北甘草、西北甘草など)見本、道具類などが展示されている。

日本を代表する江戸時代後期から明治時代初頭にかけての古民家は歴史をいまに伝える。ここは過去と現在をつなぐ歴史公園ともいえるだろう。